青山国際政経論集 105 号，2020 年 11 月

論　説

フランコ独裁体制初期における「聾唖者アクシオン・カトリカ」創設について*

渡　邊　千　秋**

はじめに

フランコ独裁体制におけるカトリック教会のあり方に関しては，これまで多くの研究が蓄積されてきた。中でも平信徒の中心的団体であった「アクシオン・カトリカ」に関する研究は，近年著しい進展をみせ，平信徒の活動実態が明らかになりつつある。例えば，性別と年齢別に構成されるその教区組織や，学生や労働者など「職能」別に分けられた諸部門の「アクシオン・カトリカ」を対象にした研究が主流である[1)]。その一方で，身体的障碍自体を団体創設の理由に掲げ「教区型」にも「職能型」にもあてはまらない聾唖者[2)]の団体が形成されていたことには，ほぼ言及がなされてこなかった[3)]。

本稿では，フランコ独裁体制初期に，カトリックを旗印に聾唖者の組織化を

*　本研究は JSPS 科研費 JP18K01040 の助成を受けたものです。
**　青山学院大学国際政治経済学部教授

1)　職能別組織の研究については，たとえば Feliciano MONTERO y Joseba LOUZAO (eds.): *La restauración social católica en el primer franquismo, 1939–1953*, Alcalá de Henares, Servicio de Publicaciones de la Universidad de Alcalá, 2015. 特に第 3 部を参照されたい。

2)　本稿においては 1940 年代はじめという時代性を考慮し，「聾唖者」，「盲目者」「健常者」等の単語を使用する。

3)　ただしバルセロナ支部の活動については研究が開始されている。以下を参照されよ。Cristina SALA CARBONELL: *La comunidad sorda en la posguerra. Acción Católica de Sordomudos de Barcelona, 1941–1976*, Barcelona, Centre Recreatiu Cultural de Sords de Barcelona, 2011.

© Aoyama Gakuin University, Society of International Politics, Economics and Communication, 2020

めざした「聾唖者アクシオン・カトリカ（Accion Católica de Sordomudos）」について考察する[4)]。

機関誌について

本稿では，「聾唖者アクシオン・カトリカ」がカスティーリャ語で発行した機関誌『沈黙の声[5)]』を主な資料として用いる。1941 年 1 月の第 1 号から 1942 年 7 月の第 19 号を用い，フランコ独裁体制黎明期にカトリック平信徒の主導で結成された聾唖者組織の政治的・社会的機能について考察する。

まず機関誌『沈黙の声』がどのような出版物であったのか，明らかにしておこう。編集長は「聾唖者アクシオン・カトリカ」を創設した E. マルティン・パスクアルが担った。また発行にあたっての管理運営は，マドリードのアルミランテ通り 17 番地にあった「聾唖者アクシオン・カトリカ」の事務局が責任をもつが，実際の印刷発行はドクトル・マタ通り 3 番地にあったフェレイラ印刷所が行った。前述の期間を通じて，月 1 回発行された機関誌は 1 部 50 センティモであり，年間購読料は送料含めマドリード市内が 5 ペセタ，その他の地方では 5.50 ペセタであった[6)]。

機関誌の発行部数は不明である。読者層には「聾唖者アクシオン・カトリカ」に所属する人々はもちろん，その周辺の関係者も含まれていた。興味深いのは，第 3 号から企業広告を掲載している点である。掲載が無料であったか有料であったかは不明なのだが，戦後の紙不足のなかでも限られた紙面を調整して複数回掲載していることから，少なくとも，外部との接点を保とうとする努力を見て

4） アクシオン・カトリカ研究の中での言及状況とは対照的に，スペインにおける聾唖史研究では保守的な団体として言及がなされる。

5） スペイン語タイトルは，*La Voz del Silencio. Órgano de la Formación de la Acción Católica de Sordomudos*. 本稿では以下 *LVS* と略記する。マドリード市立定期刊行物資料館がマイクロフィルムで保管する版を利用する。文献カタログレファレンスは以下の URL を参照されたい。（http://catalogos.munimadrid.es/cgi-bin/hemeroteca?TITN=18497）なお，本稿で使用する全 URL の最終閲覧日は 2020 年 7 月 27 日である。

6） 定期購読申込用紙が第 2 号に付随している。*LVS*, 2, febrero 1941, p. 4.

取ることができよう。企業名・住所・電話番号・事業内容を記した簡単なものばかりであるが，少ない時でも 1 号に 3 件，多いときには 1 号に 6 件ほどの掲載があった。ホテル業，写真店，靴の修理，電球や布の小売店，宗教書を扱う書店，そして弁護士事務所まで，広告を出した企業の業務内容は多岐にわたっている。また多くがマドリード市街地中心部の住所であるが，ホテルについてはバルセロナ[7]，サラゴサ[8]などの住所も散見され，それらが複数回掲載されていることにも留意しておきたい。

紙面は，通常 4 ページ構成である。論説が第 1 面に掲載された。組織は男女別に活動しており，女性部門の活動や運営に関連する女性からの意見に 1 ページが割かれる傾向にあった。また，拡大しつつある各支部の 1 か月の間の活動が掲載された。あくまでも組織体として，支部レベルでの情報が多く，受賞や結婚，また家族が没したというような会員に関する個人的な情報の掲載は頻繁ではなかった。聾唖の聖人伝以外は，カトリック的教義は大きく扱われておらず，また聖職者顧問をはじめとしてその他の聖職者による署名記事も掲載されていない。「聾唖者アクシオン・カトリカ」が主宰した比較的規模の大きな式典への聖職者の参加については言及があるが，その他では聖職者の日常的な深い関与を示す記事が少ないのが特徴である。また，多くのアクシオン・カトリカ機関誌には顕著にあらわれる教会による検閲済みの表現もみあたらない。

第 1 号の副タイトルには，聾唖者アクシオン・カトリカ機関誌（*Órgano de Formación de la Acción Católica de Sordomudos*）と記されているが，バルセロナ支部の設立を契機として，1941 年 4 月の第 4 号では聾唖者アクシオン・カトリカ全国機関誌（*Órgano Nacional de Formación de la Acción Católica de Sordomudos*）と，「全国の（Nacional）」という語を含む副タイトルに変更された[9]。機関誌は，「聾唖者アクシオン・カトリカ」の支部が増えるたび，そのニュースを掲

7） Hotel París. 所在地は c/Cardenal Casaña, 4. Barcelona. 10 回にわたり掲載。
8） Hotel El Sol. 所在地は c/Alfonso I, 24 y Molino, 2. Zaragoza. 4 回にわたり掲載。
9） «Nuestra Unidad», *LVS*, 4, abril 1941, p. 1.

載している。実際には全国的な組織化には至っていないなかでのこの副タイトル変更には，組織の聾唖者統合の願いが込められていると考えられる。

全国規模での組織化へむけての努力の一環として機関誌の出版を継続するなかで，聾唖者であるメンバーは，ハンディキャップを背負っていても，自分たちは文字を使ったプロパガンダを展開することができ，それが必要なことなのだ，という自覚に目覚めていった[10)]。

第二共和国下における聾唖者：マドリードの国立聾唖者学校を例に

内戦終結直後にカトリックを旗印とした聾唖者団体結成の動きが起きたのは，第二共和政下の教育政策の結果もたらされた聾唖者の境遇が一部影響していると考えられる。

スペイン第二共和政は，唯一の，また万人のための無償教育制度を謳い，共和国のために役立つ国民を育成しようとした。しかし，万人のために整備しようとした教育制度によって，結果として全体のなかの少数であった聾唖者が教育を受ける場を大きく制限されたのは否定できない事実である。マドリードでの例をみよう。マドリードにあった「聾唖者・盲目者国民学校（Colegio Nacional de Sordomudos y de Ciegos）」には，全国にいる 450 名ほどの聴覚・視覚に障碍をもつ生徒のうち，165 名が通学していた[11)]。しかし共和国政府が具体的な引っ越し先を示さないまま「聾唖者・盲目者国民学校」を閉校し，その建物を女子師範学校として使用したため，「聾唖者・盲目者国民学校」の生徒たちが行き場を失ってしまった。また教育は脱宗教的であるべきとされ，それまで聾唖者の学校のさまざまな業務を担っていた修道女が現場から去った 1933 年以降，マドリードにおける聾唖者の学校教育は停止したまま，スペイン内戦に突入し

10） José Luis LÓPEZ RUIZ: “El verano y nuestras preocupaciones”, *LSV*, 18, junio 1942, p. 1.「私たちの不運［聾唖であるということ］への無理解に対して，文字という武器を用いて高貴な戦いを挑まねばならない」と述べる。

11） Alfredo ALCINA MADUEÑO: «Las enseñanzas de sordomudos durante la II República Española. Una perspectiva histórica», *Historia de la Educación*, 29（2020）, p. 227.（http://campus.usal.es/~revistas_trabajo/index.php/0212–0267/article/view/8167）

た。

フランコ独裁体制期にはいった 1940 年には，マドリードの「聾唖者・盲目者国民学校」再開にむけて「行政的な手続き」が始まったが，それはこの学校関係者の一部にとっては共和国への協力者としてのパージを意味した[12)]。関係者 34 名中 29 名には地位保全が認められたが，5 名には職場追放もしくは職場からの一時的隔離を命ぜられた[13)]。その後も体制にとっては「聾唖者の教育」は相対的にいって重要性が低いものと判断され，使用する校舎の場所も定まらなかった[14)]。実際の学校再開は，1947 年になってからのことであった[15)]。

健常者と聾唖者との協力による聾唖者の権利回復をめざして

戦後も聾唖者が感じていた疎外感は，『沈黙の声』にみられる次のような発言に伺うことができる。

> 私たち聾唖者には聴力と言語能力が不足するから，健常者は私たちが不完全だと思うのだろうが，そうではない。人間の基本は精神と知性であって，2 つの能力［聴力と言語能力］が欠如していることによって，逆に，このあまりに堕落した世界の悪やあまり上品とはいえないエゴイスティックな感情から守られているのだ[16)]。

「聾唖者アクシオン・カトリカ」はこのような思いをもつ聾唖者を糾合することを目指し，健常者であるマルティン・パスクアルによって 1939 年にマドリードで組織された。聾唖者を会員とするが，健常者に対しても賛助会員の寄付を

12） Alfredo ALCINA MADUEÑO: «Las enseñanzas . . . », p. 238.

13） Alfredo ALCINA MADUEÑO: *La política educativa de las enseñanzas de sordomudos en España a través del colegio nacional de sordomudos de Madrid*（*1875–2000*）, Tesis doctoral, Departamento de Historia de la Educación y Educación Comparada, Facultad de Educación, Madrid, UNED. 2014, p. 279.（http://e-spacio.uned.es/fez/view/tesisuned:Educacion-Aalcina）

14） Alfredo ALCINA MADUEÑO: *La política educativa* . . . , p. 288

15） Alfredo ALCINA MADUEÑO: «Las enseñanzas . . . », p. 239.

16） José Luis LÓPEZ RUIZ: «La necesidad del progreso en nuestra cultura», *LSV*, 17, mayo 1942, p. 1.

つのった[17]。社会的にはマージナルな存在として位置づけられ，ともすれば自分からもマージナルな存在となっていった聾唖者が，内戦後の混乱のなかにあっても自分たちの力で生き抜けるように，聾唖者の「よきカトリック」としての人格形成を目指した団体である。マルティン・パスクアルは，ハンディキャップを持つことは，国家に奉仕できない理由にはならないと機会あるごとに述べ，その思想は会員にも共有されていった。ある会員は次のように言う。

> 誰にも寄生は許されない。すべてのスペイン人は自分の能力に応じて働かねばならない。しかし第二次世界大戦がはじまり，危機的な状況は続いている。学校も閉鎖されたままである。皆で集まって力を尽くし，私たち自身を組織化しようではないか[18]。

「聾唖者アクシオン・カトリカ」が問題視していたのは，当時の民法における「読み書きを知らない聾唖者は精神錯乱者同様後見が必要である」とする規定であった。逆転の発想で，読み書きができれば市民として認められるのであるから，読み書きを学ばない者は甘えているだけだとして，まずは第二共和国下で十分な教育が受けられなかった人々を対象に活動の輪を広げることを試みた[19]。

また『沈黙の声』での発言からは，盲目者の組織が常に自分たちのライバルであり，比較の対象でもあったことが読み取れる。

> 盲目者には全国連合があり，職業訓練の学校をもち，その組織は国家が公式に指導し，誰も仕事に就けないことがないように，名誉ある生活を保障するため，各人の適性に合わせて彼らのための特殊な工場を建てるまでになっている。このような盲目者への助成に類似したものは［聾唖者にも与えられることが］どうみても，正しく，自然で，正統なことで

17） 機関誌に記述はなく，会員の会費や総人数，会則などに関する詳細は不明である。
18） Pedro CARRERA HERNÁNDEZ: «El problema del trabajo en el sordomudo», *LSV*, 16, abril 1942, p. 4.
19） Carlos BUTRAGUEÑO: «Charla con mi hermano el que habla», *LSV*, 3, marzo 1941, p. 2.

ある[20]。

こうして聾唖者アクシオン・カトリカは，聾唖者に好意的な健常者の協力を得ながら，第二共和国期に失われた人格形成の場を私的にも公的にも取り戻そうとする団体として，聾唖者のあいだで少しずつ活動の場を確保していった。

「聾唖者アクシオン・カトリカ」結成へ

内戦終結後もなかなか進展しなかった聾唖者の，特にその青年層のための教育・人格形成の場を提供することをめざし，自分自身も20歳代だったマルティン・パスクアル[21]が中心となって設立されたのが「聾唖者アクシオン・カトリカ」である。初代会長となったマルティン・パスクアルは健常者であって，聴覚障碍はなかったのだが，戦後復興のなかで取り残され，マージナルな存在である聾唖者をカトリック教会の組織内に取り込むことに尽力した。彼は，「神と祖国の再建のために有益でありたい[22]」と考え，組織がマドリード以外の地域に拡大するよう率先して働いた。次のことばが「よきカトリック」として運動に関わる彼の思想を明確に表現している。

> 神とスペインこそが，私たちが見捨てられた状態から，そして私たちが生きてきた衰弱状態から復活するための拠り所，私たちのただ一つの拠り所，である。[23]

フランコによるスペイン内戦終結宣言後ほどなく，アクシオン・カトリカ内に聾唖者の組織を設立しようとする動きが起こり，1939年10月29日の王たるキリストの祝日に，マドリードで最初の会合が開かれた。こうして，カトリック教会内組織としての「聾唖者アクシオン・カトリカ」が設立されたわけであ

20） Pedro CARRERA HERNÁNDEZ: «El problema del trabajo . . . », p. 4.
21） 2004年に90歳で逝去。死亡広告は以下を参照されたい。https://sevilla.abc.es/esquelas/veresquela.asp?clave=6236
22） «Nuestro fundador», *LVS*, 1, enero 1941, p. 1.
23） *LVS*, 1, enero 1941, p. 6. 挿入句の形で，目立つように文字のポイントをあげ，他の文章から独立して配置されている。

るが，その運営を支える思想のなかには，宗教的な様相のみならず，政治的信念としてのフランコへの礼賛がみられた。例えば『沈黙の声』第 1 号では，独裁者フランコと彼の体制への賛同を示す巻頭言にてページの半分を割いている。

俯瞰すれば，内戦終結直後から，カトリック教会と体制との間での平信徒運動の指導権をめぐるコンフリクトが顕在化しつつある時機のことである。1939 年 9 月の法令によって，統一ファランヘによる組合組織の統合が既に開始されており，アクシオン・カトリカ内の専門部門であるカトリック学生連合は，統一ファランヘが指導するスペイン大学生組合（SEU）に吸収されようとしていた[24)]。またトレード大司教 I. ゴマが全てのスペイン人の和解を希求しトレード大司教区報に発表した司牧書簡『戦争からの学びと平和の義務』をアクシオン・カトリカ青年部が自らの機関誌『しるし[25)]』にのせようとしたおりには，体制側の検閲により掲載が差し止められるという事件も起きた[26)]。こうして，教会内組織としてのアクシオン・カトリカの自治をめぐる攻防が繰り広げられていた頃に，「聾唖者アクシオン・カトリカ」が設立されていることは，注目に値する。まさに教会と体制との衝突がおきているなかにあって，聾唖者の権利を守る団体として，宗教と政治の間で「うまく立ちまわる」ことを運命づけられた団体でもあったことが伺える。

1940 年 2 月 18 日に，マドリード=アルカラ司教 L. エイホ・イ・ガライの命により，総司教代理として派遣された C. モルシーリョによって本部が祝福・聖別され，以降，聾唖者のカトリック的人格形成を目指してさまざまな活動を行い，また組織を全国に拡大するための宣伝を展開するに至る[27)]。そして創立 2 周年となる 1941 年 10 月までに，マドリードの他に，アルバセテ，バルセロナ，バリャドリードの各支部が誕生した[28)]。その後もアビラやマリョルカへと設立

24） Alfonso ÁLVAREZ BOLADO: *Para ganar la guerra, para ganar la paz. Iglesia y guerra civil, 1936–1939*, Madrid, UPCO, 1995, pp. 460–461.
25） スペイン語タイトルは *Signo. Órgano de la Juventud de Acción Católica*.
26） Luis SUAREZ: *Franco*, Barcelona, Ariel, 2005, p. 134.
27） El cronista: «Un año de vida», *LVS*, 1, enero 1941, p. 6.
28） «De mes a mes», *LVS*, 10, octubre 1941, p. 3.

の運動は拡大した。

教会内組織「アクシオン・カトリカ」の一員としての聾唖者

スペインにおけるアクシオン・カトリカでは，基礎組織は，ひとつの小教区教会内で性別ごと・年齢ごとに構成される 4 つの部門であり，それぞれの部門の自律性を尊重する形態をとっていた。

第二共和政期には社会情勢に合わせた都市労働者や農業労働者といった職能別の専門部門が機能しはじめたが，組織面では基礎組織である小教区教会のセントロに帰属したため，階級間の差別主義が生じた。その後，フランコ独裁のもとで出された 1939 年のアクシオン・カトリカ新基本方針では，平信徒の聖職者ヒエラルキーへの従属が強化され，司教区レベルでの活動が促進された[29)]。

このような背景をもって生まれた「聾唖者アクシオン・カトリカ」は，教区を中心とした組織体ではなく，耳が不自由である・発話に困難がある，といった人間のハンディキャップを旗印に平信徒のイニシアチブで起こした超小教区・超司教区の新しい運動体であった。だからこそ，通常推奨される「型」を外れる組織の存在を教会内で正当化するためにも高位聖職者からの支持を必要とし，要所要所で，スペインにおける「アクシオン・カトリカ」組織内の団体として，高位聖職者からの支援をとりつけ，また自分たちの側からも，高位聖職者への支持表明を行うことを怠らなかった。

マドリードに設置された本部の祝別については既に述べたとおりだが，その他の式典の開催にあたっても高位聖職者の支援を得ている。たとえば，1940 年 11 月 3 日には，「聾唖者アクシオン・カトリカ」創設 1 周年を記念する式典が開催された。マドリード＝アルカラ総司教代理 C. モルシーリョの司式で，本部に近いサンタ・バルバラ教会[30)]で団体旗の祝別が行われた。なおこの聖別時

29） Feliciano MONTERO GARCÍA: « El nacimiento de la Acción Católica especializada obrera y universitaria (1942–1956) », en Feliciano MONTERO GARCÍA, Joseba LOUZAO VILLAR: *La restauración social católica en el primer franquismo, 1939–1953*, Alcalá de Henares, Universidad de Alcalá, 2015, pp. 151–152.

30） サンタ・バルバラ教会は当時の政治と宗教のあいだの密接な関係性の象徴であっ

の代母は，「聾唖者アクシオン・カトリカ」女性部代表委員の J. プリダ・デ・カボットであった[31)]。

1941 年 10 月に，サラマンカ司教であった E. プラ・イ・ダニエルがスペイン・アクシオン・カトリカを国家レベルで指導するトレード首座大司教に任命された折には，「聾唖者アクシオン・カトリカ」は教皇庁へ祝電をおくった。そして，教皇ピウス 11 世が「聾唖者アクシオン・カトリカ」へ祝福を伝えるという内容の，教皇庁国務長官をつうじて送られた返電を掲載した。また，機関誌『沈黙の声』第 11 号の巻頭言では，E. プラ・イ・ダニエル首座大司教を「完璧な聖職者であり，一番心に掛けているのは，スペインのキリスト教的な新しい社会秩序の基礎となる，正義と愛と慈善にもとづく社会司牧である」という文言を大司教の顔写真とともに掲載した[32)]。

1942 年に，教皇ピウス 12 世がドイツのバイエルンでの教皇使節を努めてから 25 周年を迎える折には，それを祝福する記事を巻頭言で掲載し，今日私たち［パパさまの］子どもたちはみな教皇ピウス 12 世の健康と治世とのために祈念すると記した[33)]。

「全国」組織へむかう過程

「聾唖者アクシオン・カトリカ」は，聾唖者がまったくばらばらの組織に所属していることに言及し，階級や所有財産，地位の違いなどに関係なく，全てのスペイン人聾唖者のための単一組織となり，聾唖者皆を自らに統合することを望んだ[34)]。

た。たとえば，1939 年 6 月 20 日に内戦での勝利を記念してフランコが剣を奉納するセレモニーを行ったのがこの教会であった。Alfredo GRIMALDOS: *La Iglesia en España, 1977–2008*, Barcelona, Península, 2008, p. 57.

31） « Actividad de Acción Católica. Acción Católica de Sordomudos », *ABC*, 3 noviembre 1940, p. 8.

32） « Nuestra adhesión al nuevo Primado », *LVS*, 11, noviembre 1941, p. 1.

33） « Nuestra filial adhesión al Santo Padre en sus bodas de plata con el episcopado », *LVS*, 17, mayo 1942, p. 1.

34） «Unificación», *LVS*. 9, septiembre 1941, p. 1.

当初はマドリードのみで活動を開始したのだが，すぐに組織拡大の契機がおとずれた。1940 年にはいると，J. カボット・アパリシオを中心とする「アルバセテ聾唖者の友人協会」が接近をみせた。一定の期間を経て，同協会は解散し，同年 9 月，マルティン・パスクアル会長が現地へ出向き，「聾唖者アクシオン・カトリカ」が協会が築いてきた人材を引き継ぐかたちで，アルバセテ支部が創設された。こうして，「聾唖者アクシオン・カトリカ」にはじめての支部（“Delegación”）が結成され，カボット支部長のほか，書記 T. カノ，財務 J. サンチョ，顧問 F. バルベラン，そして女性部代表 J. メストレによって支部の役員会が構成されることとなった[35)]。

しかし「聾唖者アクシオン・カトリカ」が全国組織を自認するようになったのは，カタルーニャ地方のバルセロナで組織を立ち上げてからのことである。1941 年の四旬節に 500 名ほどの参加者をえて，一連の講演会をバルセロナで開催した[36)]。既存の聾唖者訓練校（Instituto Educativo de Sordomudos）の講堂で開かれたこの講演会では，口述での講演にくわえて手話も用いられた[37)]。そして，全国会長マルティン・パスクアルの後押しと J. バトリェ神父の協力によって，1941 年の聖週間に，老若男女 200 名ほどの聾唖者を擁するバルセロナ支部が設立された[38)]。初代バルセロナ支部長には P. セヒモンが任命され，彼は，神と祖国のために役立つよう力を尽くすと決意を述べた[39)]。アクシオン・カトリカ・バルセロナ司教区連合の援助により，セネカ通り 12 番地に事務局を構えた[40)]。

1941 年 6 月には，バルセロナ支部役員会のメンバーとして，セヒモンを支部長に据えつつ，書記，財務，会計各 1 名，2 名の顧問，そして M.A. バレンティ

35） «Primera delegación en Albacete», *LVS*, 1, enero 1941, p. 8.
36） Mariano PLANELLES: «Las conferencias cuaresmales», *LVS*, 4, abril 1941, p. 3.
37） Pedro SEGIMÓN CISA: «Acción Católica de Sordomudos en Barcelona», *LVS*, 4, abril 1941, p. 6.
38） María Ángeles VALENTÍ DE SEGIMÓN: «¿Qué es la santa misión?», *LVS*, 4, abril 1941, p. 2.
39） Pedro SEGIMÓN: «Saluda», *LVS*, 4, abril 1941, p. 3.
40） «De mes a mes», *LVS*, 5, mayo 1941, p. 3.

女性部代表と4名の女性部補助員が任命された[41]。支部長セヒモンは，支部の自治権を強めた連合をつくるのではなく，バルセロナの聾唖者も全国的に統一されたプログラムで動けるような組織展開をしたいと抱負を述べた[42]。バルセロナ支部の加入は，統一組織としての拡大に希望を与えた。全国会長マルティン・パスクアルは全会員に対して，

> 表面的な統合におわる連合体（Federación）を模索することはしません。同じ指導者のもとにある，真実の統合を追い求めましょう，そして今日，私たちを憎々しげに見ている諸協会のなかにあるライシスモ，非道徳性，反愛国主義を撲滅するために働きましょう。[43]

と呼びかけている。

こうしてカトリック的な全国組織の確立を目指すことを自認するようになった「聾唖者アクシオン・カトリカ」は，マドリード本部から機能を分離しマドリード「支部」とするために刷新を行った。マルティン・パスクアルの兼任がとかれ，新たな支部長にはアルバセテ支部長であったカボットが就任した。書記 J.M. アリスティサバル，副書記 A. セビーリャ・ペレス，財務 J. カバニーリャス，会計 H. サン・クレメンテ，女性部代表プリダ・デ・カボット，管理部委員 J. ブランコ・マルドナド，出版宣伝委員 J. サラゴサ・ベルトラン，研究会委員 F. アリスティサバル，互助委員 F. クエンカ・ペレス，スポーツ委員 J. エルナンデス・パルドといった面々が選ばれた[44]。またマドリード支部の支部長となることに決まったカボットの代わりに，F. バルベランが，アルバセテ支部長となった[45]。

1941年10月には，全国会長マルティン・パスクアルの後援をうけ，A. ロブ

41） «Delegación de Cataluña», *LSV*, 6, junio 1941, p. 4.
42） Pedro SEGIMÓN CISA: «Acción Católica de Sordomudos . . . », p. 4.
43） Estanislao MARTÍN PASCUAL: «La organización nacional», *LVS*, 4, abril 1941, p. 1.
44） «De mes a mes. Nueva Junta Directiva», *LSV*, 10, octubre 1941, p. 3.
45） «De mes a mes», *LSV*, 8, agosto 1941, p. 3.

レド・マルティンを支部長としてバリャドリード支部が結成された。書記 E. バルディビエソ・コンデ，財務 F. アティエンサ・フォンセカ，会計 M. ベラスコ・アルバレス，出版宣伝委員 J. ベアデ・リョレンテ，研究会委員 E. ロペス・ペレス，スポーツ委員 F. フライレ・カルボ，女性部代表 J. ペラル・エレロが任命された[46)]。

こうして複数の支部を内包するようになった 1941 年秋には，「聾唖者アクシオン・カトリカ」全国評議会が開催され，各支部の代表が集った。そこでは会員に子供が生まれたり，会員が病気に懸ったり亡くなったりした場合に援助の手を差しのべようと，全国助成基金の設置が決定された。またこの基金によって各支部に設置される総合診療所を改善することも計画された。労働保護推進部（Fomento de Protección al Trabajo）の設置に関しても議論され，各支部が職業訓練教室を運営し，聾唖者であることが工場などに入所するうえでの障害とならないように組織として尽力することが決定された[47)]。

1942 年 4 月にはアビラで支部が結成された。25 名ほどの就学年齢をすぎた聾唖者の青年たちがいたとされるアビラの聾唖者グループの長だった J. サン・ロマン・コリノが「聾唖者アクシオン・カトリカ」本部を訪れ，相談を重ねつつ創設された支部であった。支部結成後は，そのままサン・ロマン・コリノが支部長となった。書記 D. マルティン，財務 J. ラオルデン，会計 L. バルテ，補助顧問 E. ベロンが支部役員会メンバーに任命された。なお，他の支部でみられる女性部の代表委員の名前がないのが目立つ[48)]。

1942 年 5 月には全国評議会のメンバー構成が決定され，団体結成初期から積極的に関与した会員が役職についた。会長はマルティン・パスクアルが連続して務め，同書記長に P. オラオルトゥア，総管財人に J. カボット・アパリシオが任命された。また支部の役員が数名づつ，その職務上全国評議会委員となった[49)]。こうして「聾唖者アクシオン・カトリカ」の全国レベレの指導部が形づ

46） «Acción Católica de Sordomudos en Valladolid», *LSV*, 10, octubre 1941, p. 4.
47） «Consejo Nacional», *LVS*, 11, noviembre 1941, p. 2.
48） «Acción Católica de Sordomudos en Ávila», *LVS*, 16, abril 1942, p. 1.
49） «Consejo Nacional», *LVS*, 17, mayo 1942, p. 2.

くられた。また 1942 年夏には全国会長による支部への巡察が行われた。彼は，アルバセテ，パルマ・デ・マリョルカ，バルセロナ，バリャドリード，アビラの順で，各支部に出向いた[50]。この時期が，全国評議会がマドリードに機能集中を図る分水嶺となったと思われる。

また，1942 年 7 月には，前年に無原罪の御やどり修道会との協力体制が生まれていたパルマ・デ・マリョルカで，支部が創設された。支部長は L. クレウエットであり，書記 J. フステル，財務 S. ムニョス，会計 M. バルセロ，補助顧問 J. リャブレス，代表顧問 M. ホフレが任命された[51]。

少し時間をさかのぼるが，全国規模での聾唖者の組織化を射程に据えた「聾唖者アクシオン・カトリカ」は，バルセロナに進出した時期に広範なアンケートを実施した[52]。その内容は，氏名・住所・年齢・なぜ聾唖者になったか・どこで教育を受けたか・家族に聾唖者，聾者，半聾者がいるかどうかを問うものであった。大まかな結果として公開された数値は，スペイン全体の聾唖者は 20000 名から 25000 名であると述べている[53]。現状では調査結果の詳細データは確認できないが，組織拡大の方策を練るために使われたと思われる。

組織における女性の位置づけ

「聾唖者アクシオン・カトリカ」は，早々に，聾唖者の女性の糾合をめざし，女性部（sección femenina）を創設した。超小教区的・超司教区的な組織であっても，男女別の部門形態であるところは，スペインにおけるアクシオン・カトリカの通常の型を踏襲した。とはいえ，実際には男女間の連携は通常の教区教会でのアクシオン・カトリカよりも密であったようである。女性の積極的協力なくしては，「聾唖者アクシオン・カトリカ」の活動はうまく展開しなかったと

50） «El presidente nacional inspecciona las distintas delegaciones», *LSV*, 19, julio 1942, p. 1.
51） E. MARTÍN PASCUAL: «Acción Católica de Sordomudos en Mallorca», *LSV*, 19, julio 1942, p. 4.
52） «De mes a mes», *LSV*, 8, agosto 1941, p. 3.
53） «Reportaje Radiofónico», *LSV*, 11, noviembre 1941, p. 3.

考えられる。

女性部代表委員だったJ. プリーダ・デ・カボットによれば，聾唖者アクシオン・カトリカは，祖国の道徳的征服を準備する精神的な民兵を育て，魂の征服に乗りだそうとしているところであるから，聾唖者女性も連帯しなければならない，と理解された。まずは関係者間のネットワークを構築することに重点を置き，これまでアクシオン・カトリカからは遠ざかっていた人々と，手紙でコミュニケーションをとることからはじめようとする。機関誌『沈黙の声』を送付して「聾唖者アクシオン・カトリカ」の活動を広く知らせることを含め，地道な活動を展開した[54)]。

聾唖者の女子をもつ親には，彼女らを「聾唖者アクシオン・カトリカ」に送り出すように呼びかけた。そして，聾唖者女子の人格形成のために，スペイン語文法や算数，そして宗教を教えられる人員を確保し[55)]，実際，数を数えることができない女性の聾唖者にそれを教える実践的な教室を開いた[56)]。また，肉体的な鍛錬にも注目し。健康で明るい若い女性平信徒を養成するため体操に着目するほか，テニスを教えるなどしたのであった[57)]。

会員の人格形成における講演会の位置づけ

このような女性部の活動にみられるように，設立当初の「聾唖者アクシオン・カトリカ」は，聾唖者のなかでもとくに基礎教育を受ける年齢をすぎてしまった聾唖者に対し，宗教的実践を支援しつつ日常生活に必要な便宜を図り，聾唖者が神と祖国の再建のために役立つ人間になるよう支援することを目的としていた[58)]。自分たちは世間から疎まれ，見捨てられた存在だと考えるべきではない，聴覚に障害があっても，文化的人格形成は必要である，という考えに立っ

54） Josefina PRIDA DE CABOT: «Llamamiento», *LVS*, 2, febrero 1941, p. 2.
55） Ibid.
56） A.S.: «En nuestras clases», *LVS*, 3, marzo 1941, p. 3.
57） «El deporte en la sección femenina», *LVS*, 4, abril 1941, p. 2.
58） «Una nueva sección», *LVS*, 5, mayo 1941, p. 5.

ている。

通常，アクシオン・カトリカは会員の霊的人格形成をめざすため，黙想会などの宗教実践を促進していたが，「聾唖者アクシオン・カトリカ」の機関誌を読む限りでは，全体的な黙想会や霊操開催の記述はみられない。一般的な司祭とのコミュニケーションには障碍により一定の壁があったと考えられる。その意味で，特に四旬節に開かれる講演会が，黙想会の代わりの役割を果たしていた。たとえば1941年四旬節には4月6日から13日まで，マドリードの本部を会場にして，過日全会員を対象とした講演会が開かれた[59]。会員にとっては，全国会長の講演に接する貴重な時間帯であった。

また，「聾唖者アクシオン・カトリカ」は，時折，外部者むけの講演会を開催している。人々に聾唖者がおかれた状況への理解を深めてもらい，またできるところで既存組織との協力関係を築き，将来的には組織への融合を試みる目的があったと思われる。演説者は多くの場合，全国会長マルティン・パスクアルであった。彼がバルセロナ支部設立のために出向いた折には，その滞在を活かして，外部向けの講演会も設けられたのは一例である。バルセロナ司教の代理であり司教座聖堂参事会員であるビラセカのほか，ビリャ・フアナ校校長のJ. アルシナ，年金信用金庫（caja de pensiones）長であるE. ルニョ・ペニャ，ことばの実験場（Laboratorio de la Palabra）主催P. ベントサ，カタルーニャ聾唖者学校（Instituto Catalán de Sordomudos）長のE. トルトサなどが出席した[60]。このように，「聾唖者アクシオン・カトリカ」が主催する講演会は内部向けには会員の霊的・精神的修練，外部向けには人脈拡大の目的をもっていた。

その一方で，会員には，自分の本拠地で講演会などの催しがあるときにだけ集まるのではなく，日々，日常生活のなかで積極的に事務局へ顔をだすことを呼びかけた。そうすることで，会員間の協力と友情をはぐくむことができるとし，生活に根差した組織として会員を包摂することを目指した[61]。

59） «Cuaresma», *LVS*, 3, marzo 1941, pp. 1–2.

60） Pedro SEGIMÓN CISA: «Acción Católica de Sordomudos . . . », p. 6. 開催費用はアクシオン・カトリカ・バルセロナ司教区連合が負担した。

61） «Presencia», *LVS*, 12, diciembre 1941, p. 1.

支部の活動，その実情

マドリードでの活動をあらためてここに見ておこう。組織がつねに目指していたのは，聾唖者が国家のために役に立つ人間となること，聴覚に障碍をもつ人々には大変困難であるとされた文化的人格形成を行い，社会における居場所を確立するということであった。そのため，多くの文化的な行事が開催された。そのなかでは，実際に男女間の協力が見られた。たとえば，守護聖人である聖フランシスコ・サレジオの祝日の行事として，男女会員の合同企画による劇が演じられた[62)]。創設 2 年目を記念する行事のなかでも，手話を用いた演劇が行われた[63)]。また，第二共和国期に初聖体を祝うことができなかった聾唖者の要望を受け[64)]，1941 年 6 月 8 日，マドリードのサンタ・バルバラ教区教会で 14 歳から 22 歳までの聾唖者男女 6 名が初聖体を祝った[65)]。

また，聾唖者にキリスト教的で社会的，かつ愛国的な人格形成を施すには，スポーツが大変重要な役割を果たすことを認識し，スポーツ部をつくった。体操，テニス，ペロタ，ボート，バスケットボール，自転車，水泳など，サッカー以外のスポーツも取り入れようとする一方で，最初に行ったのはサッカーチームの結成であった[66)]。身体をつくるという点に関連しては，聾唖者にとって適切な診療を行うため，男性医師・看護婦が常駐するクリニックを早期に開設したことには，「差別される主体」であるがゆえの身体のあり方へのこだわりがみえる[67)]。

また視覚を活かせる文化的行事が積極的に開催された。マドリード議会議長ニエト・アントゥニェス，芸術批評家ヒル・フィロルやエンリケ・デ・ラフォルスなどを審査委員とする美術展覧会も，評価などは男女別ではあったが，開

62） El cronista: «La festividad de San Francisco de Sales», *LVS*, 2, febrero 1941, p. 4.
63） «Segundo aniversario», *LVS*, 11, noviembre 1941, p. 6.
64） «De mes a mes», *LVS*, 5, mayo 1941, p. 3.
65） «De mes a mes», *LVS*, 6, junio 1941, p. 3.
66） «El deporte», *LVS*, 1, enero 1941, p. 7.
67） Dr. RORDÍGUEZ Y RODRÍGUEZ: «Algo sobre nuestra clínica», *LVS*, 3, marzo 1941, p. 4.

催された[68]。会員の読み書き能力の向上をめざし，会長自らが教壇にたつこともあった[69]。また，会員の就職を支援するため，活版印刷技術を学ぶことのできる教室や，建具屋となる練習を積むことができる教室を運営し，職業訓練の場を設けた[70]。

初期の段階で，会長が念頭に置いたのは十分な学校教育を受けないまま時間を過ごしてきた成人，もしくはそれに近い青年層の聾唖者のフォローアップであった。聾唖者学校が再開されず，聾唖者が教育を受ける環境が整備されなかったため，聾唖の子どもたちの状況にも目を向ける必要があった。そこで「聾唖者アクシオン・カトリカ」は，子どもの聾唖者の部門を創設し，教育年齢にある男女のための講座を臨時に開いた[71]。『沈黙の声』では，そのための活動資金を調達しようと，募金が募られた[72]。

> 聾唖の読者のみなさんへ
> あなたと同じような聾唖の，たくさんの子どもたちが，あなたを必要としています。あなたはこの子どもたちを助けることができるのです，おなかをすかせないように，教育を受けられるように援助することができます。
> 今日は，子どもたちのために私たちからお願いします。コーヒーや映画を我慢して，援助金を私たちに送ってもらえませんか。
> 将来，すべての奉仕にふさわしい人となるような霊的な栄養にかえて，あなたの名で私たちから子どもたちに渡します。

また，状況改善には家庭の環境を変える必要性があるとも考えられていた。家庭内で聾唖者であるために見捨てられている子どもを心にかけ，親にたいして，聾唖の子どもを迷惑と考える思考を転換するよう呼びかけた[73]。会員にむ

68） «Nuestra exposición artística», *LVS*, 11, noviembre 1941, p. 8.
69） Carlos BUTRAGUEÑO: «Charla con mi hermano . . . », p. 2.
70） «Segundo aniversario», *LVS*, 11, noviembre 1941, p. 4.
71） «Una nueva sección», *LVS*, 5, mayo, 1941, p. 5
72） «Lector sordomudo», *LVS*, 14, febrero 1942, p. 1.
73） A. VIUDES: «Eduquemos a los niños», *LVS*, 14, febrero 1942, p. 2.

かって呼びかけられた「憎むな，赦し，愛せ[74]」というスローガンに象徴されるように，聾唖者にも健常者にも現状を受け入れながら，キリスト教的な愛によって他者へ奉仕することを呼びかけたのである。

子どもの聾唖者のための国立学校（Colegio Nacional de Sordomudos）がほしい[75]，という願いは，その後，教育省が教育改革のための委員会を編成した時に，全国会長マルティン・パスクアルがメンバーとして任命されたことによって[76]，実現性を高めることとなった。

時の経過とともに，「聾唖者アクシオン・カトリカ」には，その他の聾唖者団体に所属する人々が入会するケースもみられるようになる。たとえばマドリード聾唖者協会元副会長のホセ・サン・フアンは，「聾唖者アクシオン・カトリカ」へ入会し，マドリード支部の職業訓練教室の責任者になった[77]。とはいえ，全国的な統一組織化には至らなかった。

内戦の勝者としてのフランコへの支持

「聾唖者アクシオン・カトリカ」は，機関誌第 1 号の巻頭言で，フランコへの絶対的な支持を表明した。これは，この時期の体制側出版物に共通の特徴である。

> 私たちの［機関誌］第一号が発行されるのと同時に，公式に，熱烈な心からの支持と愛を私たちの首領，国家元首，総司令官フランコ将軍に表明したい。
> 私たちは，社会の再キリスト教化のため，すべてをキリストに基づいて確立させ，また私たちの仕事が祖国スペインの向上と権勢に恵みをもたらすよう，活動していく[78]。

74） *LSV*, 11, noviembre 1941, p. 6.
75） José Luis LÓPEZ RUIZ: «La necesidad del progreso en nuestra cultura», *LSV*, 17, mayo 1942, p. 1.
76） «De mes a mes», *LSV*, 17, mayo 1942, p. 3.
77） «De mes a mes», *LVS*, 12, diciembre 1941, p. 2.
78） «Adhesión a nuestro Caudillo», *LVS*, 1, enero 1941, p. 1.

また，この巻頭言は「フランコ！ スペインよ，立て！」と結ばれる[79]。

「聾唖者アクシオン・カトリカ」は，自由主義下の復古王政期から第二共和政期にかけて，聾唖者は沈黙させられていたのであるが，フランコによってその眠りから解放されたと考えている。カトリシズムの理念と，神と祖国に奉仕する統一ファランヘ的な理想を結びつけて，聾唖者のためのアクシオン・カトリカを強化しようと会員に呼びかけ[80]，後もフランコへの支持を表明し続けた[81]。内戦を終結させたフランコなくして現状はないとして，勝者の側にたつことを明示したのである。

全国会長マルティン・パスクアルは，内戦の勝者であるフランコ，また統一ファランヘによる国民運動を支持する姿勢を明確に打ち出した。たとえば，1941年8月にアルバセテ支部において支部全会員が参加して開かれた講演会では，彼自身が「聖戦としての内戦」や，「国家サンジカリスト運動」について基調講演をおこなった[82]。また，聾唖者による劇の公演がマドリードで開催する時には，会長自らが誰の作品を用いるべきかを提案した。最終的には，P. ムニョス・セカ[83]，J. M. ペマン[84]といった劇作家たちが書いた作品をもとに公演の演出がなされた[85]。

独裁体制の安定なくして組織の発展もありえないことを考慮し，内戦を，会員の記憶に残そうとする活動も行われた。会員のレクリエーションであった遠

79） Ibid.

80） El sordo compatriota: «El momento histórico», *LVS*, 3, marzo 1941, p. 4.

81） たとえば，内戦終結宣言3周年を記念して「再度，私たちの無敵の指導者であり祖国の救済者に，へりくだったしかし決意にみちた支持を表明します」と述べた。«En el tercer aniversario de la victoria», *LVS*, 15, marzo 1942, p. 1.

82） «Delegación de Albacete. Primer Cursillo de Conferencias», LVS, 8, agosto 1941, p.4.

83） スペイン内戦時に王党派・カトリックであることからアナルコサンディカリストに殺害された，劇作家。http://escritores.bne.es/web/authors/pedro-munoz-seca-1879–1936/

84） ジャーナリスト，劇作家。カトリック全国布教者協会，カディス支部の支部長を務めた。政治活動にも関与し，プリモ・デ・リベーラ独裁またフランコ独裁における体制協力者と評される。スペイン王立アカデミー会員（1936–1981）であった。https://www.rae.es/academicos/jose-maria-peman-y-pemartin-0

85） «Teatro», *LVS*, 2, febrero 1941, p. 3.

足では，マドリードの「大学都市」[86]，トレードのアルカサル[87]，サン・ロレンソ・デ・エル・エスコリアルのバシリカ[88]など，マドリード近郊におけるスペイン内戦の前衛，激戦地となった場所や，聖戦イデオロギーを支えるとされた，過去のスペイン帝国を象徴する場所が訪問地となった[89]。同様に，バルセロナでは，バルセロナ支部の聖職者顧問やアクシオン・カトリカ青年部長などの参加を得て，ティビダボやモンジュイック，モンセラットなどと並んで共和国陣営に敵対する者が囚われ，拷問を受けたチェカ・デ・バルマジョ[90]を訪問したことが記されている[91]。

また，フランコがヒトラーのドイツ軍を補助するために募集した義勇兵，青い師団に参加してロシア戦線に出征し，聴覚・視覚を失って帰国した元兵士がマドリード支部を訪問したおりには，「聾唖者アクシオン・カトリカ」は彼を熱烈に歓迎した。『沈黙の声』では「国家と神のための戦いで献身的に働いた人物」と評価されたこのような人物こそ，健常者と聾唖者のあいだの架け橋となりうる典型例だった[92]。

以上のような動向から，「聾唖者アクシオン・カトリカ」は，聾唖者を支援する団体であろうとすると同時に，彼ら会員を通じて独裁体制を支える団体になることを志向していたと考えることができよう。

86） 内戦における共和国のマドリード防衛戦の要所であった。

87） 内戦勃発直後から 1936 年 9 月末まで，フランコ陣営の軍人や民間人が立てこもった要塞。包囲戦は 2 か月余り続いたが，フランコ陣営によって「解放」された。

88）「太陽の沈まぬ帝国」スペインを治めたフェリペ 2 世が建設を命じたエル・エスコリアル修道院の一角をしめるカトリックの教会施設。この当時は，統一ファランヘ党の創始者であった J.A. プリモ・デ・リベーラの遺体が安置されていた。

89） «Un año de vida», *LVS*, 1, enero 1941, p. 4.

90） Checa de Vallmajor. バルセロナにあった，修道院施設を利用して共和国陣営が設置・運営した監獄のひとつ。

91） «Delegación de Cataluña», *LSV*, 6, junio 1941, p. 4.

92） «Un héroe sordomudo de Guerra, también nos visita», *LSV*, 12, diciembre 1941, p. 2. なおこの人物が入会したという記述は閲覧分の機関誌には発見できなかった。

おわりに

「聾唖者アクシオン・カトリカ」は，聾唖者にカトリック的全人教育の機会を与えることを目的として，内戦終結直後にマドリードで創設された団体であった。創立者マルティン・パスクアルは，聾唖者を全国的単一組織のもとに統括することを夢見た。フランコによって復興をみたカトリック的祖国は疲弊しており，これを再び勃興させるためには，聾唖者も積極的に「新国家」の形成に貢献するべきだという信念に基づき，「聾唖者アクシオン・カトリカ」の設立にむけて行動を起こしたのであった。彼には，健常者が，困難な日常を乗り越えられるよう聾唖者に援助の手をさしのべるべきであると同時に，聾唖者自身が自ら相互扶助の場をつくりつつ，社会階層の違いによる格差・不平等感をこえて国家に奉仕しうる組織を構築することが必要であるという確信があった。結果として，「アクシオン・カトリカ」内の組織として体制のコントロールの端で活動しながら，結果的には，独裁体制の社会的機能を支える末端組織として，聾唖者の身体が国家に回収されるシステムの一部を構築していたといえる。

本稿では，入手しえた機関誌から，1942 年夏までのフランコ独裁体制初期における同団体の活動を追うことができたのみである。第二次世界大戦における枢軸国側の敗戦とともに，カトリック教会と体制との協力関係が深まるなか，その後この組織がどうなっていくのかを考察することは，資料の探索を含めて今後の課題である。